

大和八木愛宕帳 1

1 愛宕祭を考える

目次:

- 1.愛宕祭を考える
- 2.愛宕祭りとは
- 3.愛宕さんの信仰と広がり
- 4.八木愛宕祭の立山と祠-愛宕祭を支えるしくみ
- 5.「糸ぐるまは回る」と夏祭り

八木札の辻界限は、八木札の辻を交点とする横大路と下ツ道の2本の街道に沿って建つ町家、旅籠などの歴史的な町並みと、木造住宅が建て込む町なかによって構成されています。最近では、町なかのみならず街道沿いの町家にも、空き家、空き地が目立つようになってきたことはみなさんお気づきのことと思います。

また、地域の人々によって永年行われてきた愛宕祭も、ひところの賑わいが失われてきてしまいました。

八木の愛宕祭は、毎年8月23日、

24日、25日の3日間、地区の38か所に組み立て式の「祠」を設置し、町家の土間やミセの間などを利用して「立山(造り山)」をお供えするという、町並みや建物のしつらえと深いつながりを持った祭で、八木界限の住民が愛し、誇りをもってきた年中行事です。

地域の伝統行事として愛宕祭を考え、また祭を担う地域のつながりを大切にしていくために、愛宕祭についていろいろ資料を集める、ここに発信するものです。皆様からの愛宕祭の思い出お待ちします！

2 愛宕祭りとは

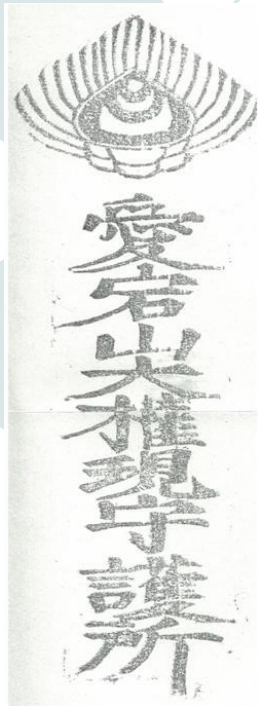
この愛宕信仰とは、火事の多かった江戸時代に「火防(ひぶせ)」の神として浸透した愛宕さんが、県下に「愛宕講」として根付いたものです。

ここ「八木」では特に盛んになり、現在の「愛宕祭」として残っていると考えられます。

愛宕信仰はこの祭りの他に「愛宕日待」があり、祭事を行う家では「愛宕さん」の軸を拝礼し、皆で会食(直会・なおらい)を行ってきました。(「祭礼事典」奈良県祭礼研究会編/(株)桜楓社発行参考)

2009年の愛宕祭りの様子↓





3 講演「愛宕さんの信仰と広がり」 鵜飼 均

元来、愛宕祭は火の祭りである。例として京都北山の「まつあげ」という火祭りがあるのは有名。愛宕さんといえば、京都愛宕山。その特徴は京都の北西の方角に見えるということである。

京都から西北にあるのが愛宕山、東北にあるのが比叡山で双壁をなす。愛宕山からは淡路島や琵琶湖が見え、京都市内をはじめとして大阪湾までも充分に見え、霊山としての信仰が「見える」ということにつながっていることがよくわかる。

全国で一番多い神社は、八幡神社だが、愛宕神社は奈良では本社で12

社、境内社は17 社で合計29 ある。また愛宕山は、全国の国土地理院の地図には130 ほどある。

愛宕山のはじまりは、『山城名勝志』という近世期に書かれた地史では、大宝年間(701～704 年)に越前の白山を開いたということで有名な行者の泰澄という人が、京都の清滝から愛宕山に登ろうとした時に、五つの仏や天狗が現れたため、そこに信仰をさせるような祠を建てて始まる。愛宕さんはそのうちの朝日峯の白雲寺というお寺にある。(2010 年1月八木での講演より抜粋 京都愛宕研究会副会長 亀岡市教育委員会)

勝軍地蔵

愛宕さんは、それぞれ時代ごとにうまくその時代を取り込んでいて、時代時代にあった形で信仰形態を変えていった。

愛宕曼荼羅の勝軍地蔵(←)が、愛宕の本地仏と言われる。白馬に乗ったお地蔵さんは鎧兜をつけていて、いわゆる軍神としての扱いである。

古代は修験、中世期、戦国時代になると、戦の時代で、勝軍「勝つ軍」と書く

ので、縁起担ぎとしてたくさんの武将の信仰を得たといわれている。

昔から「お伊勢に七度、熊野へ三度、愛宕さんへは月参り」と言われ人々はこぞって愛宕山に登った。道中には「かわらけなげ」と一丁ごとに書かれていて、素焼きのお皿を投げて楽しむ、楽しみながら上っていくというしつらえのある参道であった。



代参参り

近世期、江戸時代に入ってから火事なども多くなり、火伏せの信仰は庶民の中で急激に広まった。愛宕山へは毎月23 日24 日、そして猪の日、亥の日に代参参りをするようになったと思われる。

愛宕信仰を示す有名なお札「火を持って慎みを要す」がある。愛宕講ではお寿司をとったり、昔であれば当番さんの手料理で一つの楽しみごとで、愛宕講には持ち回りで月の掛け金でお金を貯めて代参参りの旅費に当てたり、旅行

に行ったり、集まって飲み食いしたりと変わってきている。今も伊勢講と愛宕講は盛んな信仰の一つである。

愛宕山が一番賑わう時期は千日詣の時期。今は7 月31 日から8 月1 日にかけて通夜祭だが、昔は6月の24 日が千日詣の日であった。平日の一日参れば、千日分のご利益がある。また江戸時代の『日次記事』に「男女混雑」とあり、近世、火を扱うのは女性ということがあったのか、女性にも開放していたのは興味深い。



4 八木愛宕祭の立山と祠(関大の調査)

八木の愛宕祭は、町内の組単位で行われており、愛宕さんとお供えとして立山といわれる「つくりもの」がセットとなっていた。「つくりもの」は、流行の風物や有名な風景等を一式(一種類のもの)で作り出す見せ物である。

立山は製作に時間や労力もかかり、数週間にわたって占有する場所も必要であるため、昭和40年代には、25組で行われていたが、現在は愛宕講を持ち回りでひとつ、その他は地域の有志が神社の境内や空き家等の場所を利用して祀っている。一方、愛宕さんの数に大きな変化は無いが、2組が合同で祀っている場合もあり、2008年の39

組から38組に減っている。

愛宕祭は、下ツ道の道の幅員が広い場所では、江戸期から祠が用いられており固定化している。その他の場所では祠を用いず、当番制で祀る家をかえている。

下ツ道以外の場所は、明治期以降に市街化した所も多く、市街化に伴って愛宕祭が始まったものと考えられる。

当初は当番制で愛宕祭を祀っていたが、祠を持つことによって、愛宕さんは家から出され、場所も固定化し、さらには小屋等を立てて、常設化されるようになったと考えられる。(→つくりもの)



愛宕祭を支えるしくみ

祠と立山が八木愛宕祭の特徴です。伝統を伝えながら楽しい祭りにしましょう！



下ツ道以外の地域では、家の中に愛宕さんを祀ることによって、祭りの3日間家の一部が占有されるため、住宅の広さ、特に玄関周りの広さが十分にある家では受け入れられるが、小さな家では家人の生活への影響が大きいと考えられる。

また、愛宕さんを家の中に祀り、外からお参りするという家の中と外の間を作ることが難しい家が多かったと予測され、これらが、愛宕さんが家から出て祠の中に入り、固定化した要因であると考えられる。

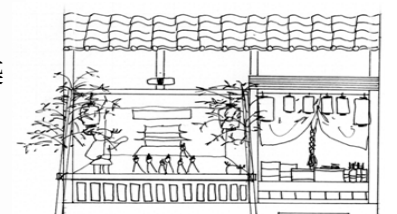
それに対し、下ツ道では、他の町に比べると伝統的な町家のしつらえを持った住宅が多く、回り持ちも可能にしていると考えられる。

愛宕祭の日の下ツ道では、家の軒から高く掲げられた青笹が、祭りの町を演出している。この笹は、愛宕さんが家の中や、家の玄関周りで祀られる場合に用いられる家のしつらえである。愛宕さんが家から出て、祠に入ると笹は無くなり、さらに町並みから離れた水路や堤防等、常設化された小屋に入ると再び笹が現れる。

愛宕祭の調査を通して、下ツ道が他の北八木の町とは異なり、伝統的な住まいが並び歴史ある地域であることが、愛宕祭を本来の姿を持続的に伝えていくことが明らかになった。

愛宕祭の現在のかたちでの存続は、下ツ道の町並みが舞台としてあることに起因しており、愛宕さんを飾る家であること、それらを当番制でまわすことのできる地域意識の高い居住者がいることが、祭りの存続にも大きな影響を与えていることが明らかとなった。

(2009年夏 関西大学建築学科建築環境デザイン研究室の調査から)



5 「糸ぐるまは回る」と夏祭り -八木を綴った本から



「糸ぐるまは回る」は、八木の町に生まれた筆者細川俊子さんの、大正8年から昭和8年の16年間のこの町での生活を綴った随筆である。

現在、この町を離れてしまった筆者が、幼かった頃を振り返り、孫に語り聞かせるように、町での暮らし、身近な人々、学校のこと、近くの遊び場、祭り等々、幼ない目で見た生活が生き生きとした筆使いで描かれている。

春夏秋冬に分類された44の随筆は、私のようにこの町に生まれ育ったものにとっては、文中に出てくる家々や祭りなど現在もそのまま残っているだけに、懐かしく幼い日のことが蘇ってくる。

筆者の記録したこの時期は、近鉄電車大阪行が開通しこの町が経済的に発展した時期でもあった。その後、第二次大戦の重苦しい気分が町を覆い始める前の明るさと豊かさが伝わってきて、町の生きた歴史を知る良い資料でもある。(T.Y.)

細川俊子著 星湖舎 2005年刊 1260円(税込)

「夏祭り」



夏休みも終りになるころに、盛大に愛宕祭が催された。八月二十三日から二十五日まで三日間にわたって開かれたように思う。町を挙げての大きなお祭で、当日までに京都の愛宕神社から分身をおうつしするのだという。町の東西南北四ヶ所に、三畳ぐらいの広さの祭壇が設けられる。とうもろこし、新さつま芋などの農作物や、おまんじゅう、餅、菓子類など数々のお供物を飾る。昼すぎころから、お守りをするお爺さんが、大きなよくひびく鐘をゴーン、ゴーンとならして、お祭りを知らせる。

町内会ごとに造り山をつくり、お互いに競いあう。祭りの一ヶ月も前から造り山の相談をし、いろんな趣向をこらす。楠公の桜井の別れや、忠臣蔵の討ち入りの場などの、昔話の一場面。電車が開通した年には、トンネルから出て町や駅を通りぬけて走る電車の風景を描いた山があった。当時流行したモダンガールの服装をした人形や、高層建築が建ち、空には飛行機が飛んでいるような未来都市を予想した山など、道路に面した六畳ぐらいのひと間の格子をはずして道から山がよく見えるように造られていた。電車で遠くから来る見物客もずいぶんあり、八木の町の名物ともなっていた。年によっては商工会などから賞金がつくことがあり、三等までは賞にあずかった。造り山の山の間をぬって綿菓子、小判焼、氷水、風船などの売り声で通りはにぎわう。カンテラの臭いにおいの中を買い歩いたものだった。

夏祭りは一年の最大のイベントであり、普段は忙しく働いている大人たちも、子どもとともに遊び、楽しめる場となっていた。

夏休みが過ぎ、私はひとまわり大きく成長したような気持ちになった。

(「糸ぐるまは回る」から抜粋、承認を得て掲載しました)

特定非営利活動法人

八木まちづくりネットワーク

奈良県橿原市北八木町2-1-5

この新聞は、一般社団法人・まちづくり担い手支援機構の「住まい・まちづくり担い手事業」のご支援により刊行しております。

愛宕祭の思い出や資料を紹介しします。NPO事務局までお寄せ下さい。